# 教員養成課程学生に対する ピアノ「弾き歌い」指導法の研究 †

平井　李枝 *
宇都宮大学 *

**概要**

教員養成課程に在籍する大学生に対するピアノ「弾き歌い」の指導法を研究した論文である。ピアノ初心者の学生が自信を持って「弾き歌い」できるよう、合理的で応用可能な簡易伴奏法を比較検討しながら確立した。また学校教育の音楽授業で必要となるピアノ演奏の基礎的知識や事項に関する諸問題についても言及した。

キーワード：音楽、弾き歌い、教員採用試験、簡易伴奏、コードネーム

## １．はじめに

本論文は教員養成課程に在籍する学生に対するピアノ「弾き歌い」の指導方法を研究するものである。ピアノ「弾き歌い」はピアノを演奏しながら歌唱する音楽的実技のことを指し、この技能は学校教育での音楽授業や音楽活動の指導において欠くことができない。教員は「弾き歌い」を通して児童や生徒に楽曲を教授するため、技能の習得が求められる。そのため小学校教員採用試験では栃木県をはじめとして、日本の大多数の地区において「弾き歌い」の実技試験が課せられている。

筆者は、2014年5月に宇都宮大学教育学部に着任し、教員志望の学生のための「弾き歌い」の授業「音楽B」を担当している。この授業では小学校音楽の歌唱共通教材24曲を、ピアノを演奏しながら歌えるよう指導している。

ピアノ演奏の技能は経験値による個人差が大きく、大学の授業においては、小学校教員を目指す学生がピアノに対して全くの初心者である場合も多く見られる。その初心者に対して半期15回の授業でピアノの演奏法を習得し、さらに歌いながら演奏できるようにするには、合理的で応用可能な指導をしなければならない。そして習得した技能を教育実習や学校教育の現場で役立てられるよう、自信を持って演奏できる楽曲を一曲でも多く習得してもらえるよう考えている。

本来であればピアノの初歩段階は、バイエルやチェルニーといったピアノの基礎的な教材から始めるのが望ましいとされているが、教員養成課程の学生に対し半年でピアノの技能を教授するには全く適していない。

ピアノ初心者の学生にとって、左手での演奏が最も難関となっていることが指導の結果明らかになった。右手は歌のメロディーを演奏することが多いため、歌に従うことで、耳で聴きながら音やリズムを確かめ自力で徐々に上達することが可能である。しかし左手の伴奏は、右手とは全く異なるリズムパターンと音程であるため、「右手と左手を別々に動かすことの難しさ」という問題に直面する。

そこで「音楽B」の授業では、学生の技能レベルに応じた教材を開発し、指導を行うことにした。そこで本論文では、ピアノを弾いたことがない学生が半年で「弾き歌い」を習得するために効果的な指導方法と簡易伴奏の方法を、実践的な研究を通した検証結果を元に論じる。

## ２．音楽授業における「弾き歌い」の重要性

学校教育の現場での音楽授業には、教員による「弾き歌い」が重要な役割を占めている。

---

† Rie HIRAI*
TITLE：A study on instruction in “singing with self piano accompaniment” for education major students.
Keywords :Music education, piano accompaniment, chord name, singing
* 宇都宮大学 教育学部
（連絡先：rie@cc.utsunomiya-u.ac.jp 平井李枝）

音楽授業の円滑な運営において、教師の「弾き歌い」技能は最も有効な手段である。特に歌唱関連の授業では、児童や生徒の実態に合わせた臨機応変で柔軟な対応が求められるため、録音媒体よりも指導者による生演奏のほうが合理的である。歌唱指導においては、指導者が範唱を行い、その後児童や生徒が続いて歌うという方式が基本的である。「弾き歌い」は範唱時に正しい音程をピアノで補強する役割を持ち、伴奏を用いながら楽曲の完成系の見本を示すことができる。CDなどの録音媒体でも可能ではあるが、生演奏による「弾き歌い」は、児童や生徒の反応や習熟度合いに合わせて速度の調整、演奏範囲の限定、繰り返しといった臨機応変な対応ができる。

音楽授業の円滑な運営に求められる「弾き歌い」の技能は、必ずしも楽譜に書かれた伴奏譜を完璧に演奏できることだけではないと考えている。児童や生徒達が歌いやすく、効率良く習得できるような「弾き歌い」を授業で用いることができるかということが重要である。

作曲家が心血を注いで完成させた歌唱教材の完璧な伴奏は、初めて楽曲に取り組む児童や生徒たちには歌いやすいわけではないということがしばしば起こりうる。そして、教員は伴奏を真剣に演奏するあまり、子供たちの様子を見ることが出来なくなってしまう。教員は授業を行いながら、学習者を観察し、習熟度等を評価しなければならない。そのためには、教師が余裕を持って「弾き歌い」ができることが重要になる。そこで本論文では、ピアノ初心者が余裕を持って「弾き歌い」でき、学習者が歌いやすい「弾き歌い」の方法について、実践を通して検証した。

## 3．ピアノ「弾き歌い」のメカニズム

「弾き歌い」とは「楽譜を読む」「鍵盤を弾く」「音を聴く」「歌詞を読む」「歌を歌う」という5つの事柄を同時進行させるという高度な技能が不可欠である。さらに授業では「学習者の観察」「学習者の支援」といった児童や生徒を指導する能力が必要となる。

ピアノ初心者学生にとって、ピアノの演奏は大変困難である。またピアノを演奏するために必要な知識も持ち合わせていないことが多くみられる。本項では、ピアノを演奏する前に必要な事柄を項目に分けて述べる。

（A）高音部譜表の楽譜を読む
（B）高音部譜表に書かれた楽譜通りに右手をピアノで演奏する
（C）低音部譜表に書かれた楽譜を読む
（D）低音部譜表に書かれた楽譜通りに左手をピアノで演奏する
（E）歌詞を読む
（F）歌詞を見ながら高音部譜表または歌唱パートの楽譜通りに歌を歌う

「弾き歌い」とは上記の（A）から（F）の事項を全て同時に行わなければならい。まず楽譜を読み、ト音譜表は右手、ヘ音譜表を左手に割り振り、楽譜を目で追いながらピアノの鍵盤を見ずに演奏しなければならない。さらに、自分自身のピアノ演奏に合わせ、歌の旋律に歌詞をつけて歌唱しなければならない。子供たちに聴かせることを想定すると、教室の隅まで聴こえる音量で歌わなければならず、ピアノの演奏と歌唱のどちらをも兼ね備えなければ成立しない「弾き歌い」は非常に高度な技能が必要であることがわかる。

### （1）弾き歌いのための確認事項

#### ①鍵盤の確認

ピアノの鍵盤には白鍵と黒鍵が並んでいるが、12音を1つのまとまりとして規則正しく並んでいるということをプリントを配布して確認を行った。その際臨時記号である♯や♭が鍵盤上でどの位置に当たるかを確認することが、ピアノの学習を円滑に進めるために重要であることがわかった。

さらにピアノの鍵盤には12音をひとまとまりとして並んでいるため、初めての学生には、どこで弾いても同じように思ってしまう。実際に音を出しながら中央のド（一点ハ音）や五線譜に記譜された音高を確認することが重要である。

#### ②指の動かし方

ピアノの演奏には両手の指を全て分離させて動かしながら鍵盤を押し奏する必要がある。

#### ③指番号と運指

両手の指にはそれぞれ指番号が振られ、楽譜上の演奏指示としてどの音をどの指で奏することが最も良いかが、それぞれの音符の上に記されていること

がある。これを運指または指づかいという。

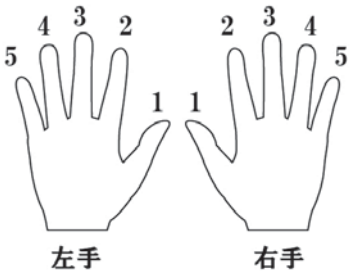



図1　両手の指番号

④爪の長さ

ピアノを演奏する際に、鍵盤をカチカチと音が鳴らないよう、爪の手入れをしておく必要がある。長い爪はスムーズな運指を妨げるだけでなく、鍵盤の隙間などに引っ掛かり爪が欠けたり剥がれたりして負傷することがあるため特に注意が必要である。

⑤椅子の座り方と姿勢

「弾き歌い」の授業において何も指導しない場合、たいていの学生は、ピアノの椅子に深く腰掛けてしまうということが明らかになった。ピアノ演奏は、基本的には座面の前半分ぐらいに腰掛けることが重要である。これはピアノの鍵盤88鍵を両手を広げて届くようにし、幅広い音域を無理のない体制で演奏するためである。

また椅子の高さも非常に重要である。

ピアノ椅子は座面の前半分に腰掛け、指を鍵盤において肘が脇からこぶしひとつ分ほど離れ、肘が鍵盤の高さより若干高くなるように、座面の高さを調整する必要がある。

⑥ピアノ用高低自在椅子の使用方法

ピアノの椅子は背付高低自在椅子が大多数の学校現場で採用されている。高低自在椅子の使用方法は特殊であることから、レバーの操作の仕方、高さの調整のコツなどの使用方法と、禁忌事項を伝えておく必要がある

⑦グランドピアノの大屋根（蓋）の開け方

学校の教育現場では、行事等によってピアノを使用する機会が多々存在する。筆者もしばしば小中学校等へ演奏のため訪問するが、ピアノの大屋根の開け方を尋ねられることが多い。グランドピアノの大屋根の開け方は非常に重要であり、誤った使用方法は危険であるため、教員養成課程の「弾き歌い」の授業ではピアノの構造なども伝授しておくことが重要である。

写真１　グランドピアノの大屋根を全開にした場合

グランドピアノはまず屋根前を後方に折りたたむように開け、その後に大屋根を上に持ち上げる。大屋根を支える棒（突き上げ棒）は全開の場合、屋根の裏側の奥にはめなければならない。合唱伴奏などで少しだけ開けたい場合は手前に短い棒を差し込み屋根を支える。学生には開閉を実践させながら指導を行っている。

⑧メトロノームの使い方

メトロノームは楽曲の速度を計測したり、速度を一定に保つために重要な道具である。楽譜上のメトロノーム表示の意味を理解し、実際の教育現場で活用できるよう実際に使用しながら用法を覚える。

⑨ペダルの使い方

ピアノの３本のペダルの役割とその効果を体感し、踏み方を習得する。右端のペダルはダンパーペダルと呼び、ピアノの弦の上に置かれた音を止めるダンパーをペダルを踏むことによって上げた状態にするため、音が保持される仕組みとなっている。中央のペダルはソステヌート・ペダルと呼び、鍵盤を押している瞬間に踏むことで、その鍵盤のダンパーのみが上げられたままになるという仕組みとなっている。ソステヌート・ペダルは使用する機会はあまりないが、学校現場では子供たちから用途と効果について質問されることがあるため、知っておく必要がある。左のペダルはシフトペダルと呼び、ペダルを踏み込むことで鍵盤および打弦装置のハンマーが

右にずらす仕組みとなっている。このことにより、弦を1本減らした状態で演奏できるため、音色がやわらかく弱くなる効果が生まれる。楽譜上ではuna cordaと指示される。

ペダルはグランドピアノとアップライトピアノでは、中央のペダルと左のペダルは全く役割が異なり、中央のペダルが最弱音ペダルとなっている。最弱音ペダルはフェルトがハンマーと弦の隙間に出現し、フェルトの上から打弦することで、音を弱めるという弱音装置である。左のペダルは弱音ペダルの機能を持ち、ハンマーを現に近づけ打弦距離を短くすることで、打弦威力を弱め、結果的に音が弱くすることができる装置である。

⑩ペダルの踏み方

ペダルは足の踵を床に付け、足の指の付け根の辺りで操作する。またペダルを使用する際には、自分が奏でる音を耳でよく聴くことが重要である。「音楽B」においてもペダルを使用したいとの申し出が多々あったため、「ペダルは耳でよく聴き、音が濁ったら踏みかえる」という基本事項を伝えたところ、どの学生もタイミングよく使用することができた。

⑪ピアノ演奏に適した靴

ピアノの演奏に際しては靴も重要である。ハイヒールやブーツなどは演奏に支障をきたす場合があるので、なるべくペダルを踏みやすい靴を履くよう注意を促す必要がある。

⑫指導に関する諸問題

・曲の始め方、カウントの取り方

学校の音楽授業では、教師は「弾き歌い」で前奏を演奏しながら、子供たちがにわかりやすいよう、カウントをとり、歌の開始位置を明確に示す必要がある。このカウントはピアノを専門とする学生でも難しいという声が上がるほどであるので、楽曲の拍子に合わせてカウントを取る練習を何度も実践しながら慣れることが必要である。

⑬歌唱に関する諸問題

「弾き歌い」で重視されがちなのはピアノであるが、歌唱は児童にとっての範唱ともなるため、最重要事項である。「弾き歌い」実施時の歌唱は、一般的な独唱や合唱と異なり、ピアノの椅子に座ったまま歌う。またピアノを演奏しながらとなると、視線が鍵盤に集中するため、姿勢が悪くなりがちである。座位による歌唱は、背筋を伸ばし、腹筋と背筋で体を支え無理のない腹式呼吸を心がけることが重要である。姿勢を改善するだけで、より大きな声で発声し歌唱できるようになる。

⑭楽譜に関する諸問題

学生は、音楽に関する用語や記譜法等、基本的な事項は学習し理解しているはずであるが、実際にピアノに向かい楽譜を開くと必ずしもスムーズに読み進められるとは限らないことが明らかになった。その原因は、楽典の教本を熟読しても、それは単なる暗記教材としての記憶に過ぎず、音楽的な実践を通しての学びではなかったことにある。そのため、教材として取り上げる楽曲の楽譜を示し、音部記号、調号、拍子記号、メトロノーム表示、強弱記号、発想表示、アーティキュレーションに関する記号等、さまざまな音楽ルールを指導する必要がある。特に小節線等は、読譜だけでは理解が深まらないため、実際に五線紙に楽譜を書きながら記号や音符の役割や用法を理解することが重要であることが明らかになった。

・ト音記号とヘ音記号

ピアノの楽譜は主に右手がト音記号、左手がヘ音記号で記譜される大譜表によるものとなっている。

## 4．初心者に最適な弾き歌い用簡易伴奏の検証

本項では初心者に最適な弾き歌い用の簡易伴奏について、難易度別に比較し、譜例を用いて論じる。小学校音楽の共通教材から一例として《かたつむり》を取り上げる。

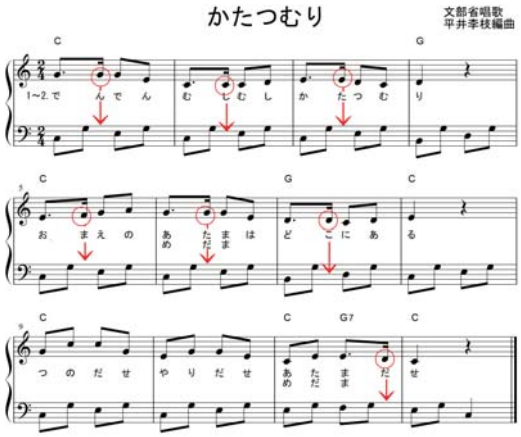
《かたつむり》は小学校１年生の歌唱教材である。１年生では《かたつむり》の他《うみ》《日のまる》《ひらいたひらいた》が共通教材とされているが、これらの４曲のなかで学生が最も苦戦を強いられるのが《かたつむり》であることが明らかになった。そもそも授業で使用している初等音楽科教育法（音楽之友社刊）に掲載されている伴奏は、対位法的に左手が動くため、ピアノ初心者の学生にとっては難しすぎて音符を理解するだけでも一苦労である。それだけではなく、難しい理由としては、《かたつむり》のメロディーに、他の３曲にはない「付点のリズム」が使われていることにある。「でーんでん　むーし

むし　かーたつむりー」というように、長く伸ばされたところに付点のリズムが用いられている。このリズムは幼少時より歌い覚えた記憶により全く問題なく受け入れられているようであるが、実際にピアノで弾いてみると、付点音符の音価を正確に奏することが困難を極める。さらに左手による伴奏型が加わると、難易度が上がり、学生たちが非常に苦労する楽曲となった。

### （1）分散和音による伴奏

分散和音による伴奏型はバイエル等初心者のためのピアノ教材で多く用いられるように、ピアノの左手伴奏型としては最も基本的な音型となっている。しかし、ピアノに初めて取り組む学生にとって、左手の指をそれぞれ独立して動かすということがいかに困難であるかを、指導を通して実感した。特に分散和音は、単純な動きではあるものの、指を動かす速度が速いため、困難を極めることが明らかになった。

以下に《かたつむり》の分散和音による伴奏型の例を提示する。

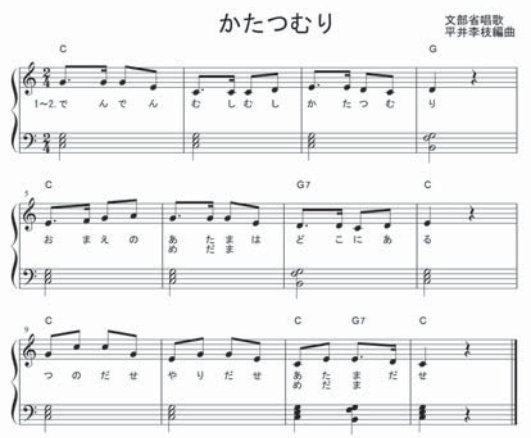



譜例１　《かたつむり》分散和音による伴奏の例

譜例１のような分散和音による伴奏型の場合、１小節間に演奏すべき音数は左手で４つとなる。この動き自体は定型として覚えこむことで演奏も可能となるが、右手とともに演奏する場合に非常に難しくなる。譜例１の楽譜上で丸印で囲んだ音は付点音符の後の短い音価となり、ここでは16分音符で記譜されている。この16分音符は1拍目の裏のさらに裏に奏さなければならない。学生にとっては、一生懸命左手を動かしているところの隙間に16分音符を弾かなければならないということになり、止まってしまったり、右手のリズムから付点がなくなり8分音符で全て演奏してしまうという現象が見られた。さらにリズムを正確に演奏しようとするあまり、演奏速度が極端に遅くなってしまうということも多く見られた。

### （2）和音による伴奏の例

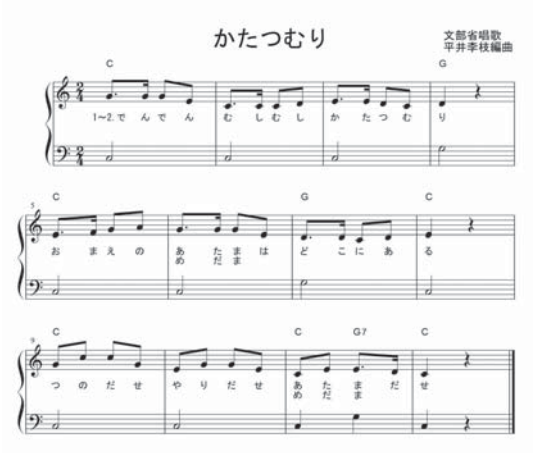
譜例１の分散和音による伴奏が非常に困難であることが明らかになったため、次に和音による伴奏の例をあげる。和音による伴奏は初心者には一般的である。ここでは基本的に1小節に1回程度、左手で和音を奏することにした。譜例1より伴奏として鍵盤を奏する頻度が少なくなったため、難易度が低下したと思われたが、実際のところはヘ音記号による左手の譜面を読み、鍵盤に指を置いて正しい位置を確認し、3つの鍵盤を同時に押し下げ、均等に3つの音を鳴らすということが、難しいということが明らかになった。一度ポジションを確定すると、同じ和音が連続する場合は円滑な演奏が可能となるが、和音の種類が変化した場合に新しいポジションを探すことに時間を費やし、なかなかリズムどおりに進まないという現象が見られた。




譜例２　《かたつむり》和音による伴奏の例

### （3）単音による伴奏の例

譜例１の分散和音、譜例２の和音による伴奏型のどちらもが、初心者にとって難しいということが明らかになったため、左手の伴奏を単音にし、さらに1小節に1度のみという単純な楽譜を作成した。




譜例３　《かたつむり》単音による伴奏の例

譜例３のように２分音符を主体とする単音の伴奏は、左手の指を頻繁に動かす必要がなく、余裕を持って次の音を準備できるため、右手と合わせるときも、スムーズに演奏することができた。さらに譜例１や譜例２で見られた演奏速度の問題も解決し、歌いやすいテンポで演奏できるため、学生の学習意欲が高まった。単音による伴奏は1小節に1回程度、2分音符を奏でる単純なものであるが、余裕ができたときには音価を半分の4分音符にし、1小節に2回同一音を奏してテンポを刻むなどの応用が可能である。

筆者が担当する「音楽B」の授業ではほとんどの学生がピアノ初心者であったため、（３）の単音による伴奏を要望する学生が9割を占めた。そのため、小学校音楽の歌唱共通教材24曲全てを、単音の伴奏による楽譜を作成した。

## ５．3種類の伴奏型による「弾き歌い」の比較

前項において、（１）分散和音（２）和音（３）単音　という3種類の伴奏型について検討を行った。（１）の分散和音による伴奏は、両手でのピアノ演奏が困難であるだけでなく、弾き歌いとなったとき、歌が聴こえにくいため、より大きな声での歌唱が求められることが明らかになった。以下の表にまとめ、3種類の伴奏を比較してみると次のような結果が得られた。

| | （1）分散和音による伴奏 | （2）和音による伴奏 | （3）単音による伴奏 |
|---|---|---|---|
| 左手の難易度 | 高 | 高 | 低 |
| 両手での難易度 | 高 | 高 | 低 |
| 同一声量による弾き歌いの聴こえ方 | ピアノがよく聴こえ、歌声はあまり聴こえない | ピアノも歌も、まあまあ聴こえる | ピアノに対して歌がよく聴こえる |
| 1小節間に奏する左手の音数 | 4 | 3 | 1 |
| 伴奏の音量（ピアノの場合） | 持続 | 減衰 | 減衰 |

表１　３種類の伴奏型による弾き歌い比較表

表１のように、（１）から（３）の３種類の伴奏のうち、最も難易度が高いものは分散和音による伴奏で、単音による伴奏が最も易しい。「弾き歌い」としての完成形で比較してみると、同一声量の場合、分散和音による伴奏は歌声があまり聴こえず、単音による伴奏は歌声がよく聴こえるという結果になった。これは1小節間に演奏する左手の伴奏型の音数と関係している。（１）は1小節間に4つの音を奏し、それぞれが等間隔で発音されるため、伴奏型の音の減衰は見られない。しかし（３）は単音による伴奏型のため、1小節間に1音しか演奏されず、伸ばした音はピアノの場合減衰する。このため（１）は全体の音量が大きくなり、（３）と比較すると弾き歌いの歌声が聴こえにくくなるいう結果となる。

学校の音楽授業では、教師による範唱が重要となるため、弾き歌いではより声がよく聴こえることが求められる。また楽曲の始まりを明確に伝えたり、子供たちの反応を見ながら授業を進めるために、余裕をもった弾き歌いをできることが重要となるため、（３）の単音による簡易伴奏が最も合理性が高いといえる。

・前奏について

前奏は楽曲の円滑な開始と歌い出しを明確にするため不可欠であるが、学生にとっては大変負担になる。そこで、簡易伴奏の場合は楽曲の終わりの4小節間を前奏として使用することで、練習に対する負担を軽減することができる。またこの方式の前奏は、子供たちにとっても楽曲を予想することができる上、1番から2番へのスムーズな受け渡しを支援する役割も持つため、利便性が高い。

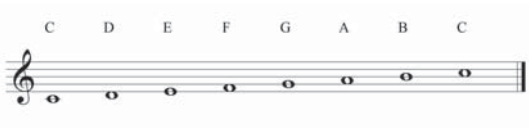
## 6．コードネームを使用した簡易伴奏

学校の音楽教育では、共通教材以外にもさまざまな歌唱教材が用いられている。その代表的なものは、歌集である。ポケットサイズの小さい本にたくさんの楽曲が収録されており、特に小学校で多く採用されている。この歌集の特徴としては四季折々の歌、行事の歌、外国の歌、日本のポップスまでのを幅広くメロディーと歌詞のみ収録しており、子供たちの楽しみとなっている。ここでも教師は弾き歌いによる指導が必要となる。歌集には専用の伴奏譜も存在するが、非常に高度な演奏技術を要するため、初心者には至難の技となる。

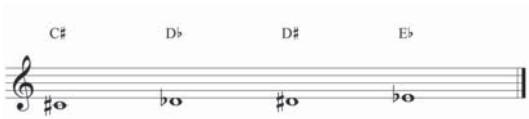
そこで、筆者はコードネームによる最も易しい簡易伴奏の方法を学生に伝授している。

コードネームは歌集などのメロディー譜の上部に小さなアルファベットで表記されているもので、その部分に合致する和音の種類を記号で表したものである。これはジャズやポピュラー音楽などでも多く採用されており、利便性が高い。

コードネームのアルファベットは和音の根音を英語表記で表したもので、ド＝C、レ＝D、ミ＝Eとなっている（譜例４）。また臨時記号はコードネーム上でも♯♭が付される（譜例５）。

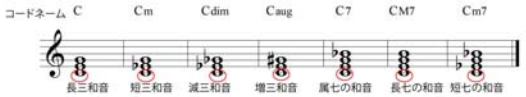



譜例４　コードネームと根音の関係




譜例５　根音に臨時記号が付された場合のコードネーム

コードネームは和音の根音（ベース）となる音をアルファベットで置き換え、基本を長三和音としている。さまざまな和音は譜例６で示したとおり、アルファベットの横に数字や英語の省略形を元にしたアルファベットで表記することで、簡潔に表している。コードネームは譜例６のように、記号を和音に置き換えて、和音配置などを奏者の技量に合わせて工夫しながら使用するものであるが、初心者の場合は前項でも述べたとおり、和音を読み解き鍵盤上で音を探すのに非常に苦労することが明らかである。




譜例６　Cを根音とする和音の例

そこで、譜例６の和音は例として7種類の和音を掲載したが、筆者はこれらの共通項のみを簡易伴奏として採用することにした。7種類の和音はそれぞれことなる音を用い、違う響きを奏でているが、アルファベットのCの文字に対応する根音ドの音は全て共通であるということがわかる（譜例６の各和音の一番下の音〇で囲んだ音）。このことから、どのような和音の種類であろうとも、コードネームのアルファベットに記された根音のみを正確に演奏することで、単音による合理的な伴奏を再現できるとの結論に至った。そしてこのコードネームの根音のみを使用する伴奏は、（３）で述べた単音による伴奏と同等の演奏効果が見られ、学生が難なく演奏できるという効果が明らかになった。さらに、苦手なヘ音記号による譜表を読むこともないため、楽しんで弾き歌いをできるようになった。

## 7．コードネームによる簡易伴奏の実践例

コードネームによる簡易伴奏は、合理的で学生のレパートリー拡充に非常に効果を発揮した。筆者の担当する授業では、コードネームによる簡易伴奏を学生が十分に理解しながら演奏できるよう、穴埋め方式によるプリントなどを用いて指導を行った。コードネームは音そのものをアルファベットで示しているため学生にとって、最もわかりやすく短時間で習得できる技法であった。子供たちの好きなアニメソング「勇気100％」「夢をかなえてドラえもん」「さんぽ」、また学生自身の愛唱歌であるポップスや

ロックなどを弾き歌いできるようになった。はじめは1小節1回程度に左手を奏する単純な伴奏であったが、熟達度が上がると拍子を刻むように左手を演奏したり、付点のリズムを加えたり各自でアレンジしながら弾き歌いに取り組む姿が見られた。

## ８．教材開発に関する今後の展望

筆者は学校現場で活躍する小学校の先生方と懇談することが多いが、そこで話題となるのは、やはり音楽授業での弾き歌いに関することである。学生だけではなく現場教員も合理的で応用可能な伴奏を求めていることを実感している。今後はさまざまな楽曲をより簡単に弾き歌いできるよう、ピアノに初めて取り組む方々が自主学習するために最適な教本を作成したいと考えている。

## ９．総論

ピアノ「弾き歌い」は学校の音楽授業に不可欠な要素として、その技能が教師に求められる。しかし、教育学部の教員養成課程で学ぶ多くの学生は、ピアノに関して初心者である。合理的で応用可能な簡易伴奏としては、単音による伴奏が最も有効な手段であった。また弾き歌いとして実施した際も、伴奏が単純であるために、歌唱が際立って聴こえる効果も持ち合わせていることが明らかになった。この単音による簡易伴奏を「音楽Ｂ」で指導して以来、ピアノ初心者の学生が「自分でもピアノが弾ける」と自信を持ち、積極的に練習に取り組む姿が見られた。また簡易伴奏のため、楽曲の完成するまでの道のりが早くなり、初心者でも半年間で２４曲の小学校音楽歌唱共通教材全てを「弾き歌い」できるようになる者も多くなった。簡易伴奏による「弾き歌い」は、学生自身も余裕をもって演奏することが可能となるために、実際の学校現場においても、子供たちの観察や評価をしながらの「弾き歌い」も実現できる。

教員養成課程の学生に対する指導においては、ピアノや歌の技能習得に限らず、音楽に関しての基本的事項から確認しながら授業を進めることが肝心である。音楽を専門とする者にとっての「当たり前」がそうではないことを十分理解したうえで、丁寧にそれぞれの役割や機能を説明することが重要であることが明らかになった。このような指導を積み重ねることで、学生がピアノや鍵盤楽器に親しみ、自信を持って「弾き歌い」に取り組み、実際の学校現場で活用したり応用できるようになることは間違いない。そして、「弾き歌い」を楽しんで演奏できる学校教員が増えることで、音楽授業がさらに充実し、子供たちが活き活きと歌う姿を期待したい。

本研究は平成27年度宇都宮大学教育学部学部長等支援経費、及び教育個性化プロジェクトで支援いただきました。感謝申し上げます。

平成28年 3月29日 受理